

高齢社会と地域コミュニティ その1

— 宮崎市老人クラブ活動実態調査から —

戸島 信一

Aging Society and Community No.1

— An Investigation about Senior Citizen's Club in Miyazaki City —

Shinichi TOSHIMA

1 問題意識と課題

高齢社会の進展が農村地域のみならず、都市地域でも顕著になってきた。高齢社会の到来がもたらす影響については、否定的側面（マイナス面）、と同時に積極的側面（プラス面）があるが、社会的にはマイナス面が強調されている。事実地域社会にとって自治会組織の活力の低下、地域コミュニティの脆弱化がみられている。しかし、自治会組織を担っているのは、ほとんどが定年退職後の高齢者の人たちであり、今後の地域社会の維持あるいは活性化にとって、高齢者の果たすべき役割は大きい。地域コミュニティの形成・維持のための仕事は、ほとんど無償労働、ボランティア労働によって支えられている。無償労働は、社会的に重要であるが、なかなか評価されない仕事である。しかし、子育てが無償労働であっても社会的には最も重要な仕事であるように、地域コミュニティを形成し、維持していく活動も社会の中では大切な仕事である。21世紀の日本は世界史に類例を見ない高度高齢社会になるのは確実になっており、その社会はまた高齢者の社会貢献に依存しなければ存続できない社会であるともいえる。

確かに高齢社会の進展は、社会の活力の低下というマイナスの要素を持つ。だが、一方で地域社会における人的構成の上で、高齢者の比重が高まるということは、成熟社会への移行を意味する。成熟社会とは、社会の構成メンバーの中で高い経験的・知的能力を持った人々の比重が高まるということである。したがって、より安定した人間関係が形成され、秩序ある社会が形成される可能性がある。その意味で、高齢者の人々が、地域社会でどのようにその能力が発揮できるかが大きな課題であるといつてよい。

高齢社会は少子化社会を背景に持つため、福祉政策上は問題視されがちであるが、長寿化という視点からみれば、社会の新しい可能性、特に高齢者の人たちの生きがい、自己実現の可能性を拡大するものだといつてよい。その意味で高齢者の自主的組織活動はもっと注目されてよいが、残念ながらその研究蓄積は弱い。

そのような問題意識で、高齢者の自主的組織活動の中心を担うと考える「老人クラブ」（「老人」という表現がひとつの差別的ラベリングになると判断する人々が多いため、名称は様々である）に焦点をあてて、高齢者達の社会活動の実態を解明してみることにした。「老人クラブ」組織は農村部を中心に1950年頃組織され始め、1970年代には高齢者の過半数を越える組織

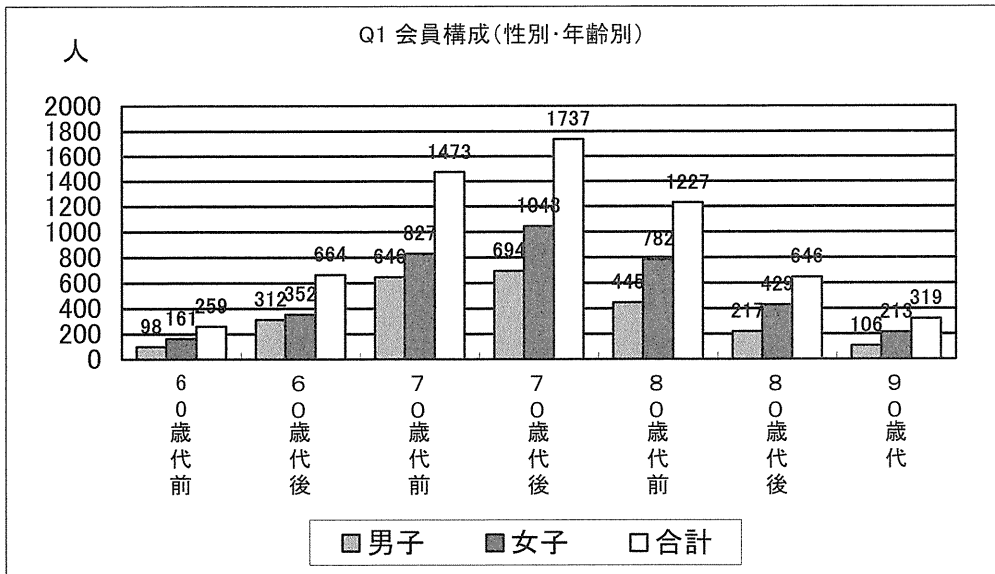
になった。やがて都市部での高齢者の増加とともに組織は全国的になったが、一方でカルチャーセンター等、生涯学習関係の活動が活発になり、クラブの組織率はむしろ低下傾向になった。全国老人クラブ連合会によると、組織の数としてのピークは1998年の134,285クラブ、会員数8,869,086名でその後、高齢者数は増加しているがクラブ数、会員数とも漸減傾向にある。

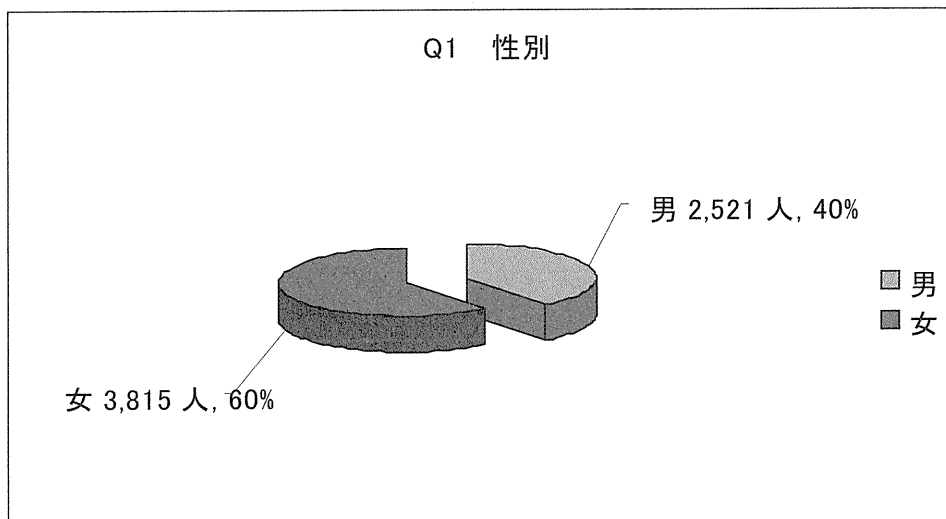
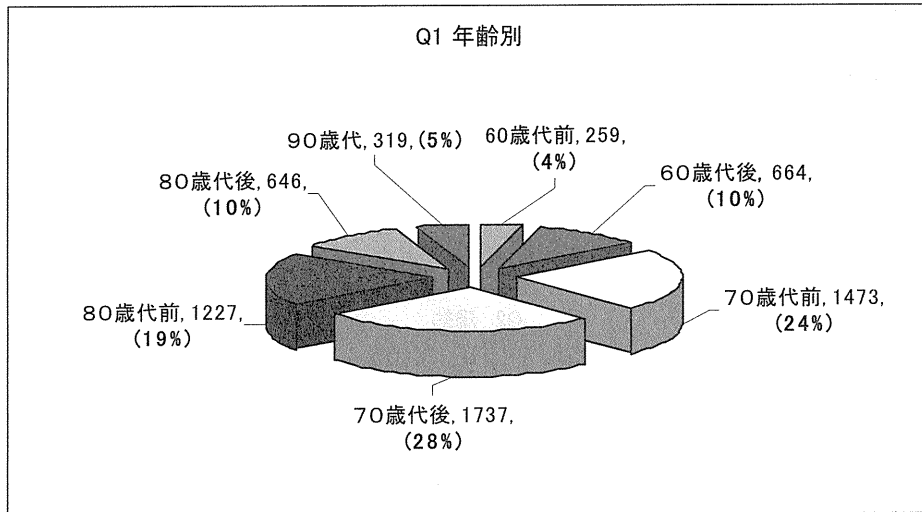
しかし、地域の包括的高齢者組織として活動している「老人クラブ」は、地域コミュニティの不可欠の構成部分であることには違いはない。今回の調査は、宮崎市の老人クラブ連合会(さんさんクラブ)のご協力を得て、宮崎市内の158の老人クラブの会長さん宛にアンケート用紙を郵送で配布し、返送していただくという方式で行った。回収できたのは128クラブで、回収率は81%であった。

2 老人クラブの会員と組織の基本的特徴

(1) 会員の年齢、性別構成

まず老人クラブの男女別、年齢別会員数を尋ねたところ、下記のような結果になった。1クラブ当たり会員数は、平均50人で男女別では男性4割、女性6割という構成である。女性が男性より多いのは、1つは平均寿命差の問題で、現在女性が84歳、男性が77歳と女性の寿命の方が7歳も長いことが影響していると考えてよい。年齢が上がるほど女性の割合は増加する。もう1つの要因は、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業の影響である。女性は家庭や地域の中で生活して来ていて、地域社会でのネットワークを豊富に持っている。男性、特に仕事人間であった男性は、ビジネス社会の中だけで生きてきたため、地域社会での人的つながりをほとんど持たない。そのため定年後も地域活動に参加できないことがあげられる。

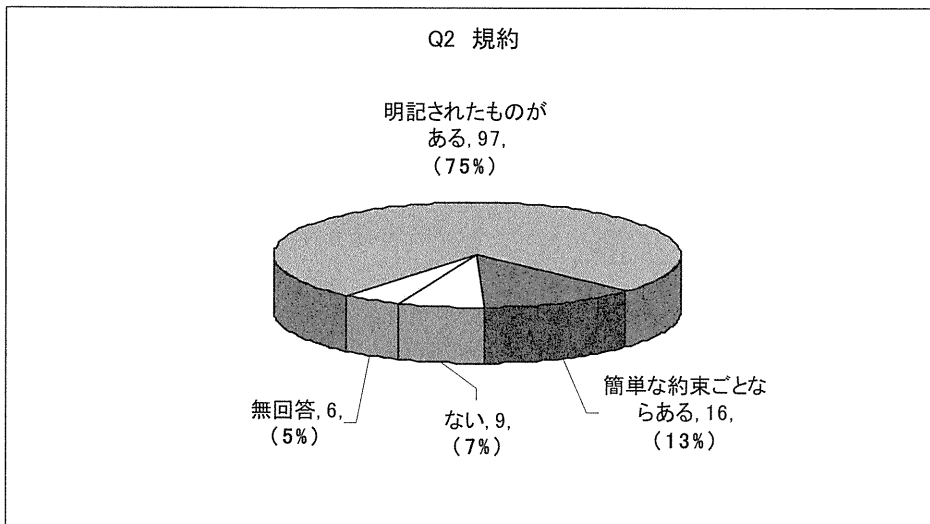




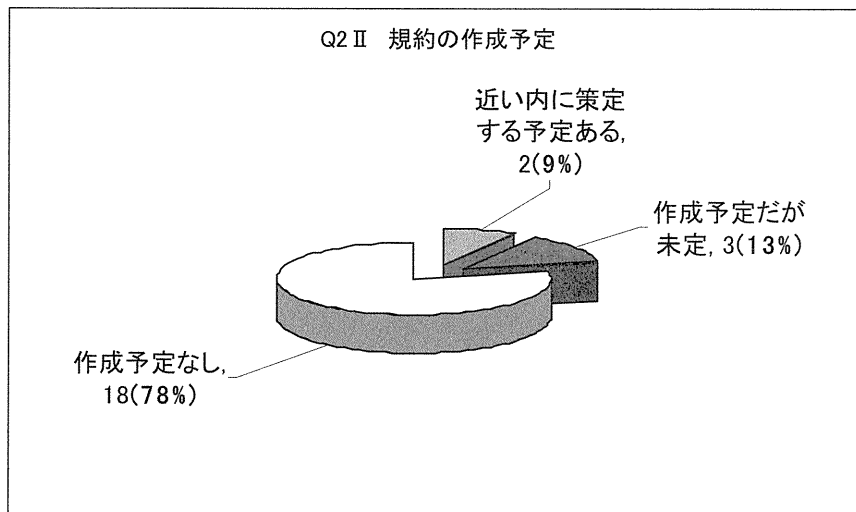
老人クラブ会員の年齢別構成をみると、70歳台が前半24%で、後半が28%、合わせて、全体の52%を占めている。次に80歳代が29%である。70歳から80歳台前半を合わせると71%になる。60歳台は14%で、会員にはなれるが、まだ老人扱われるのは抵抗感を持つ人が多いということが考えられる。ともかく、老人クラブの活動は、主に70歳代から80歳代前半の人々によって担われていることが明らかになった。またメンバーとしては男性より、女性の方が多いということが明らかになった。女性が6割を占める割には、女性の会長さんはまだ少ないが、それでも全市で10数名、約1割のクラブで女性の会長さんが登場するようになっているのは興味深いことである。男女共同参画の時代、男性、女性を問わず、それぞれ培ってきた経験と能力を發揮して活動の活性化に尽力して欲しいものである。ビジネスの社会では、まだ男性優位が根強く、その進展は遅々としているが、老人クラブのような無償労働・ボランティアの世界の方が、早く男女共同参画社会を実現するかもしれない。

(2) 老人クラブの規約

老人クラブの規約の有無を尋ねたところ、97クラブ、75%は「明記されたものがある」と答え、規約を持っていた。また「簡単な約束ごとならある」が16クラブ、13%で、ないまたは無回答は15クラブ、12%であった。自治会組織に比べると規約を持っている割合は低い、それでもきちんとした規約のもとで活動している老人クラブが多いと判断していいだろう。自主的組織ではあるが、明文化した規約を持っているということは、民主的な原則で運営されていることの証明である。



規約を持たないクラブの内作成予定が明確にあるのは2クラブ、計画はあるがいつ出来るかは未定が3クラブである。後の18クラブは今のところ予定はない。やはり持続的組織活動を展開していくためには、規約は必要だろう。回りのクラブや行政の援助が望まれる。

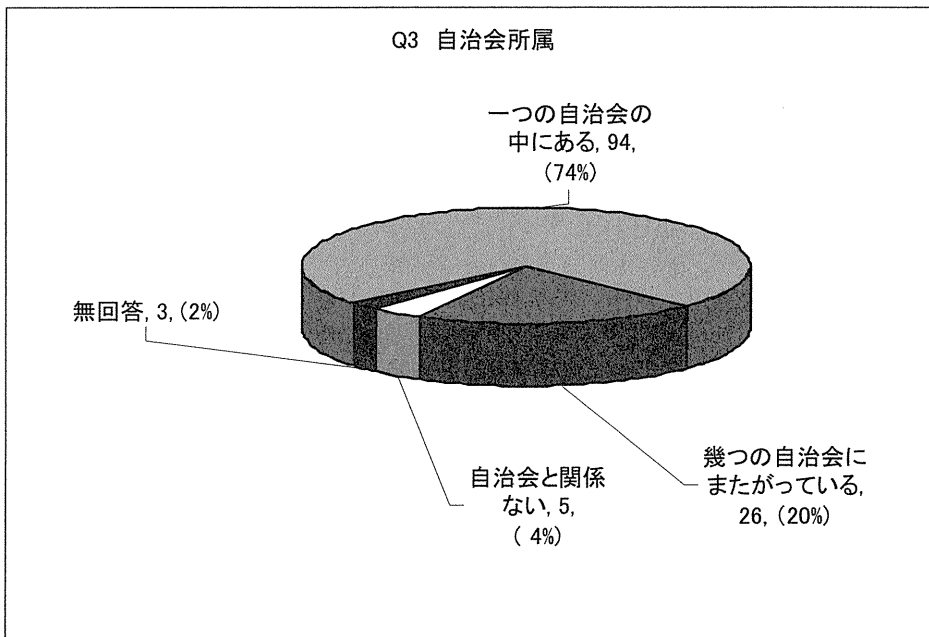


3 老人クラブの立地環境

(1) 老人クラブと自治会

自治会と老人クラブの関係を明らかにするために、この質問を行ってみた。

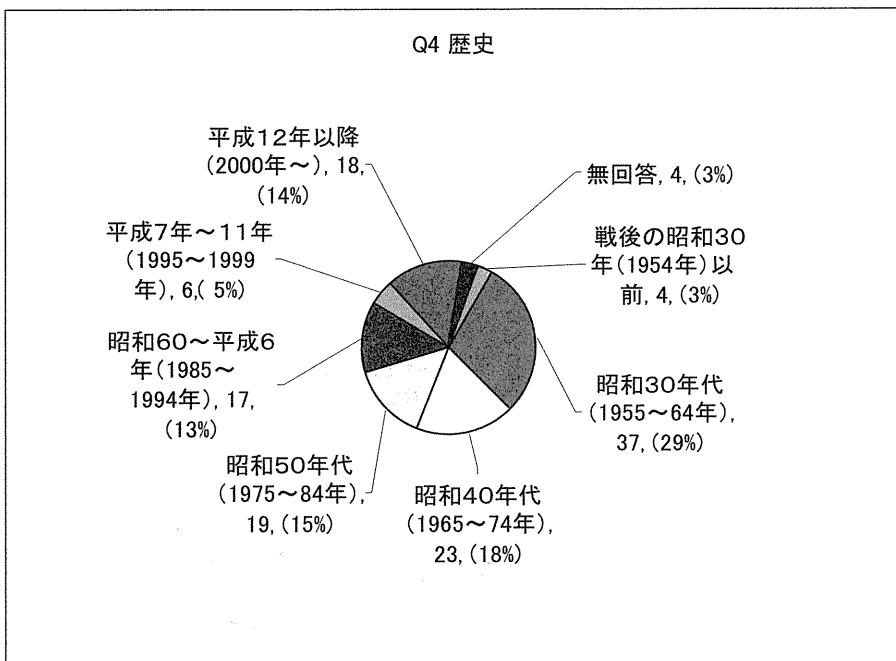
94クラブ、74%が、自治会と老人クラブが対になっていることを意味している。また1つの老人クラブがいくつかの自治会にまたがって存在しているのが26クラブ、20%である。自治会組織とは関係のない自立したクラブも5クラブ、4%存在している。老人クラブが、地域コミュニティと一致している場合は、活動しやすいという長所もあるが、一方で自治会とは全く関係のないような活動を、自主的・自立的に展開していくことは難しい。また、1つの組織が複数の自治会に関係している場合は、活動の範囲が特定できず、難しい面もあるが、かなり自主的に活動を展開することを余儀なくされる側面がある。自治会と関係のない組織は、それぞれ自由に活動を展開できる訳であるが、他の組織との連携については自動的に形成される訳ではないので、別途考えていく必要があるということになる。自治会組織と老人クラブの関係のあり方は、今後おそらく大きな問題になって来るであろう。どうしたら老人クラブも、自治会も活動を活性化できるのかが考えられなければならない。相互依存的あるいは従属的關係ではなく、相互補完的、相互協力的關係の形成、お互い自立した活動を展開しながら連携していくことが重要であると考えられる。



(2) 老人クラブの歴史

老人クラブは、全国的には戦後昭和20年代に形成され始めた。しかし、自治会組織とは違って、最初からどの地域にもあったのではない。お年寄りたちが集まって、活動できるような地域はむしろ限られていたと考えてよい。経済的なお金になる「仕事」とは別の、無償の「仕事」(ボランティア)や「遊び」の活動が可能になるような社会的条件が必要であるからである。

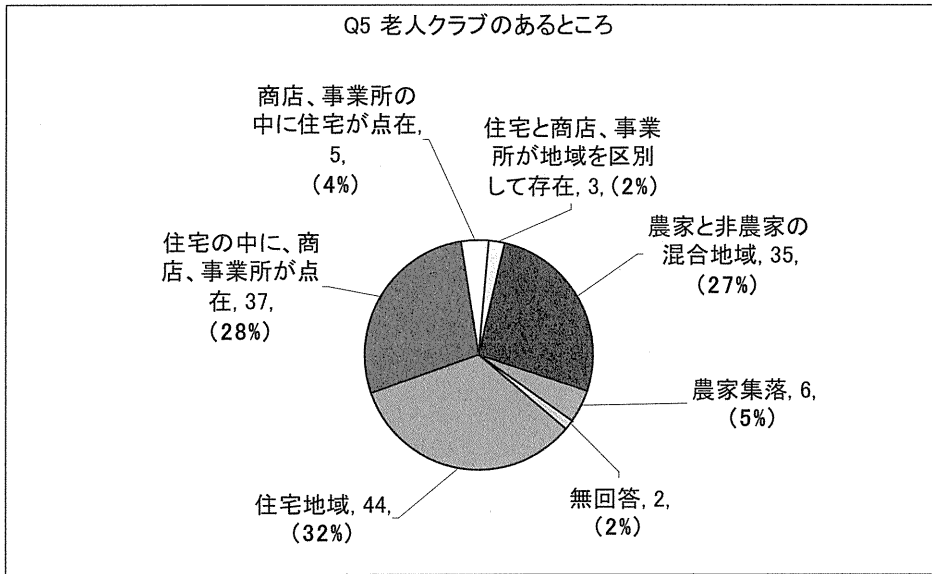
昭和30年以前の老人クラブ誕生の時期に結成されたのは4クラブ、3%に過ぎない。その後30年代にできたのが、37クラブで、29%で最も多く、40年代に23クラブ、18%、50年代に19クラブ、15%と作られてきている。昭和60年代から平成6年が17クラブ、13%、平成7～11年が6クラブ、5%で、平成12年以降も18クラブ、18%と多い。このように老人クラブの形成の時期は一定ではなく、長い歴史を持つものから、出来て間もないものまで多様である。農村部や古くからの町場では形成が比較的早い時期になされただろうし、当初は若い年齢層が集中していた新興住宅地は、時代の推移によって最近地域に高齢者が増えて新しく形成されたであろう。また一度あった組織が、リーダーの不在等の理由で消滅し、新しく再形成された組織も存在するであろう。



歴史が古くても、組織が安定している訳ではない。常に次世代の後継者を確保できるように配慮する必要がある。このような、形成の歴史に多様性を持つことに配慮した、支援のあり方や、運動のあり方を考えていく必要があると考えられる。

(3) クラブの立地地域

「住宅地域」にあるクラブが最も多く、44クラブで32%を占める。これに「住宅地域に商店、事業所が点在」している地域で37クラブ、28%、「農家と非農家の混合地域」35クラブ、27%が続く。宮崎市は戦後行政都市としての発展してきたため、外部へどんどん拡大してきた。したがって、都市の住み分けがはっきりしていない地域が多くこのような結果になっていると考えられる。商店と事業所も市内の各地に分散しており、また農村地域に都市が拡大していったため混住地域も多い。



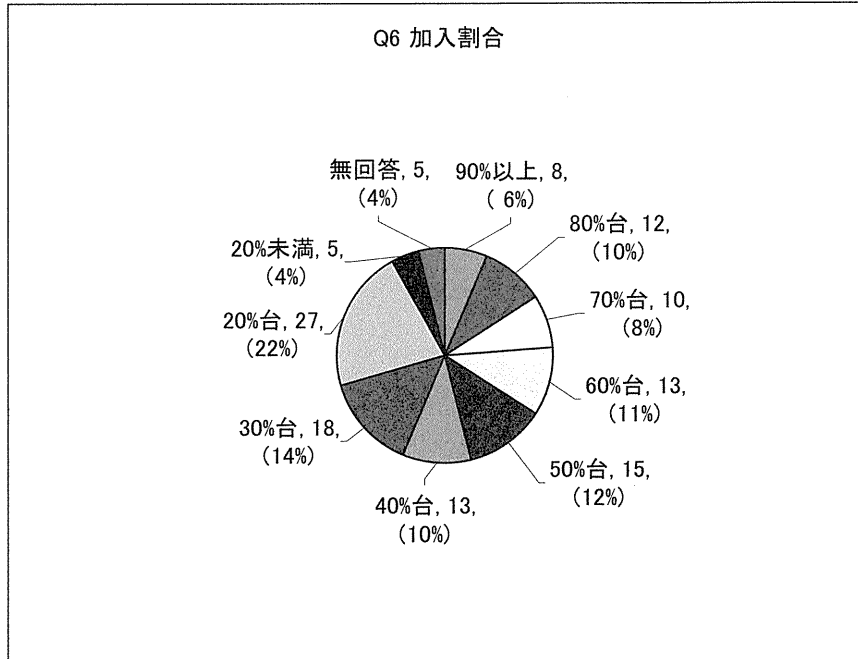
老人クラブの活動の内容は、そのクラブが存在している場所に左右されることが多いと判断される。住民構成のあり方は、組織化や活動のあり方に影響を与えることが考えられるからである。農村型住民と都市型住民のように構成員の性格が異なる場合は、組織化や運営の上で困難を伴うことが予想される。その場合どちらにも共通するような問題や課題に取り組むとともに、逆に異質性をうまく生かした活動の展開が可能であり、工夫した運営が望まれる。

4 組織率と会員の変動

(1) 老人クラブの組織率

今述べたように、老人クラブの多くが性格の異なった住民で構成されている地域に存在しているため、組織率が異なることが予想される。そこで、老人クラブに地域の老人クラブ加入対象者のどれくらいが組織されているかを尋ねてみた。

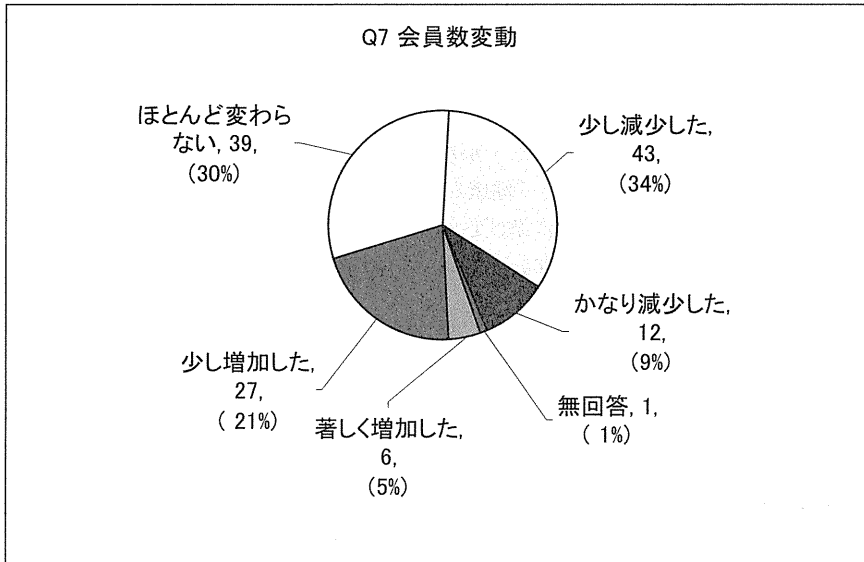
グラフのように、きわめてバラエティに富んでいる。最も多いのが地域の高齢者の内20%台の組織率に留まっているクラブで、27クラブ、22%である。次いで30%台の組織率が18クラブ、14%である。3番目が50%台の組織率で15クラブ、12%である。以下40%台と60%台がともに13クラブで11%、80%台が12クラブで10%、70%台10クラブで8%、90%台が8クラブで6%である。最初に見たように、老人クラブの加入可能年齢は60歳からであるが、実際には70歳になってから加入するケースが多い。その意味で組織率が低いのは肯けるが、組織率が低い地域が多いのは否めない事実である。入るのが当たり前の地域は予想以上に少なく（仮に70%以上と考えると）が1/4程度、入るか入らないかは自由である地域（40～60%台）が1/3程度、入る方がむしろ少数派である地域（30%台以下）が2/5という構成になっている。地縁的関係が強い農村地域ほど組織率が高いかというところどうもそうでもないらしく、後継者不足の中で農業の仕事が忙しく加入できない場合もある。とにかく、高齢者の組織率がクラブの存在する地域によって大きく異なることが明



らかになった。

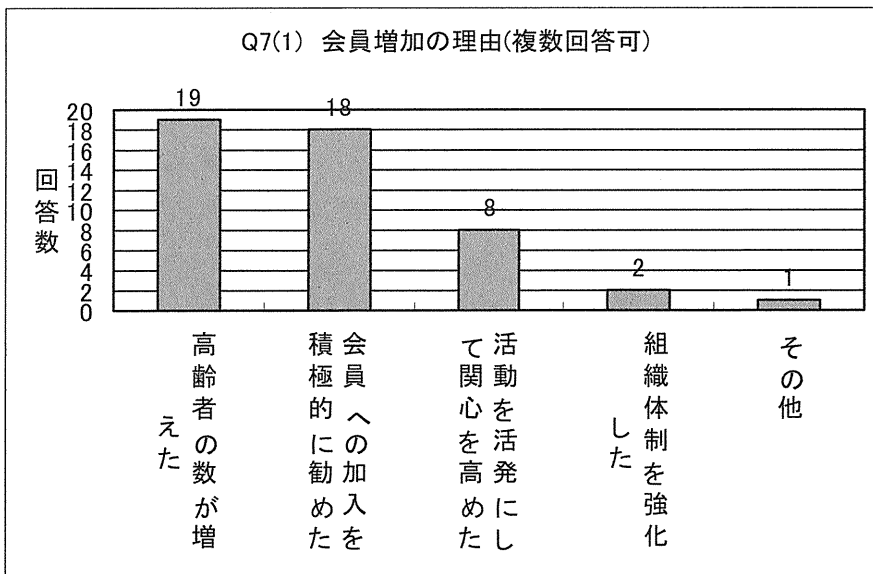
(2) 会員数の変動

次に、最近5年間での会員数の変化について質問してみた。「少し減少した」が43クラブで34%と最も多く、次いで「ほとんど変わらない」が39クラブ30%であった。「少し増加した」は27クラブで21%、「かなり減少した」が12クラブ、9%も存在している。著しく増加したクラブは6クラブ、5%であった。このように会員数を増加させたクラブも存在するが、会員増加傾向26%に対し、減少傾向43%ということになる。長寿化による高齢社会の進展で、高齢者数は毎年増加しているはずなのに、会員数は現状維持あるいは減少傾向にある組織が多いということになる。



(3) 会員増加の理由

*質問対象：前質問で「少し増加した・著しく増加した」と回答した33クラブ



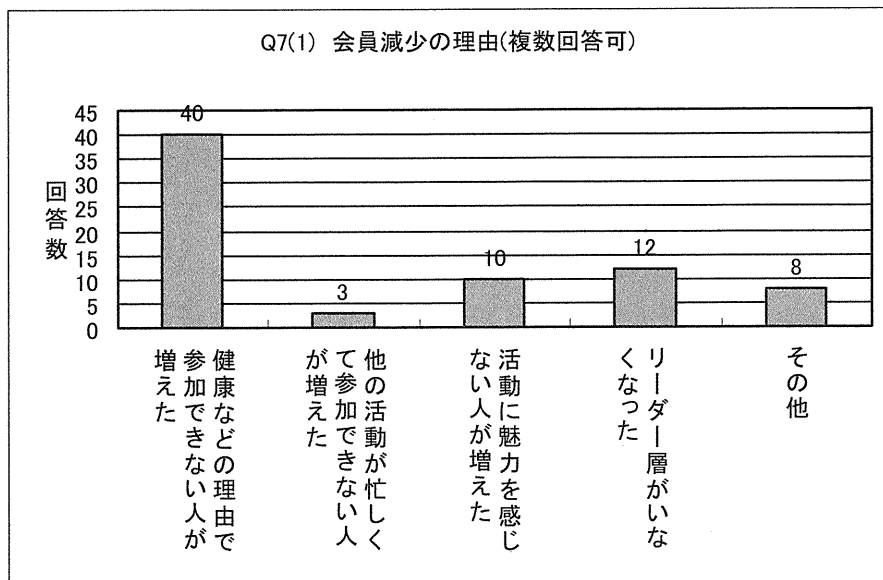
注：「その他」の回答例：グラウンド・ゴルフに参加するために来た。

増加したクラブの増加の理由を尋ねたところ、「高齢者の数が増えた」が19クラブ、58%あり、「会員の加入を積極的に勧めた」が18クラブ、55%である。また「活動を活発にして関心を高めた」は8クラブ、24%である。組織体制の強化は2クラブ6%であった。こ

のように、会員は高齢者の自然増によっても増えないことはなかろうが、やはり意識的に加入の働きかけが必要である。

(4) 会員減少の理由

※ 質問対象：前質問で「少し減少した・かなり減少した」と回答した55クラブ
 会員数の減少の理由を尋ねたところ、「健康などの理由で参加できない人が増えた」が40クラブ、73%ととび抜けて多い理由に挙げられた。老人クラブは、子どもクラブが成長することによって自動的に退会せざるを得ないと異なり、退会することが自分の意思や、健康上の



注：「その他」の回答例：死亡、入院、家族の世話、他の老人クラブ会との合併など

理由に因ることになる。まだ活動したくても、体がいうことを効かなくなり、退会せざるをえなくなる訳である。それはやむをえないことである。従って組織を維持するためには、常に新規会員を補充していかなければならないことはいうまでもない。いつまでも同じメンバーで活動はできない。

会員減少の2番目の理由は、「リーダー層がいなくなった」で12クラブ22%である。有能なリーダーもいつかは活動からリタイアせざるをえない。次期リーダーを育成できないまま、リーダーが活動できなくなると組織は危機的状況に陥ることになる。1人のリーダーに頼りすぎるのではなく、複数のリーダーで運営していくことが必要であろう。

3番目が、「活動に魅力を感じない人が増えた」で10クラブ、18%が挙げている。会員が活動に魅力を感じるような工夫が必要であろう。会員の意識や要求も時代とともに変化する。今までと同じ活動を繰り返すことだけであるとマンネリ化を招き、組織は活力を失う。また「他の活動が忙しくなり参加できない人が増えた」が3クラブ5%存在し、その他として具体的挙げられた要因は、死亡や入院、家族の世話、老人クラブの合併といったことであった。

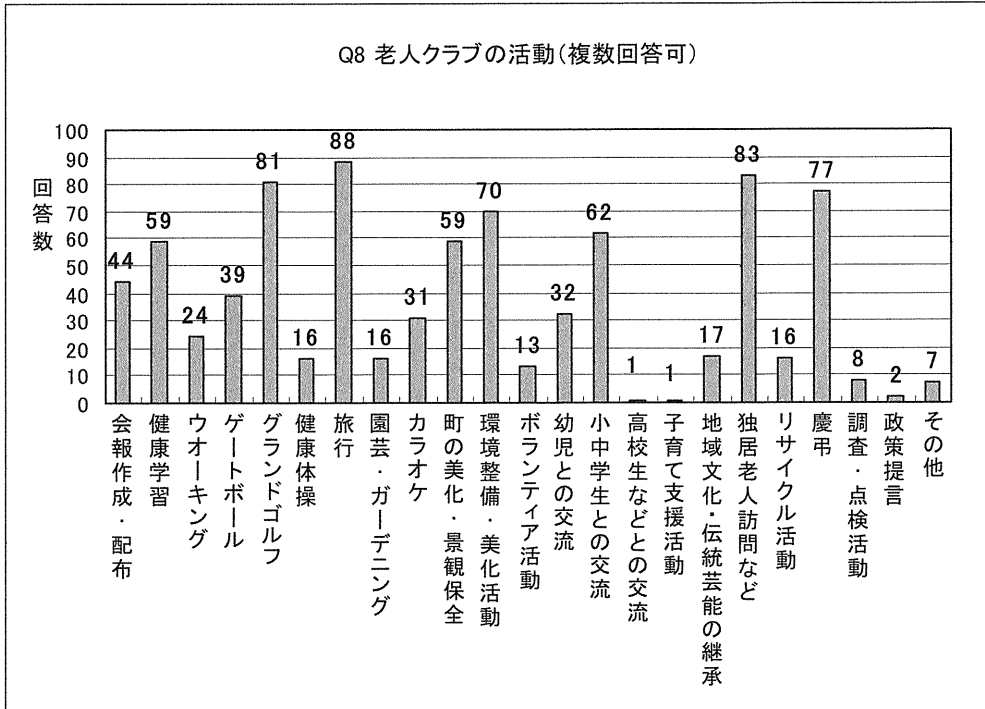
5 老人クラブの活動内容

(1) 老人クラブ21世紀プラン

老人クラブの活動は、近年多彩になってきた。老人クラブ21世紀プランによると次の分野での活動が提起されている。

- ① 心とからだの健康づくりをすすめる。
健康活動：老人クラブ「ねたきりゼロ」10か条を実践しよう。
「いきいきクラブ体操」「健康ウォーキング」「各種シニア・スポーツ」を普及しよう。
- ② 高齢者が相互に支援する友愛活動をすすめる。
友愛活動：100万人の友愛活動員（ボランティア）を組織化しよう。
- ③ 「花のあるまち、ゴミのないまち」づくりをすすめる。
奉仕活動：全国300万人「社会奉仕の日」（9月20日）活動を展開し、通年活動の発展につなげよう。
- ④ 生活と地域を豊かにする楽しいクラブ活動をすすめる。
レクリエーション活動：レクリエーション活動で楽しい仲間づくりをすすめよう。
サークル活動：一人・一趣味・一貢献のクラブ活動をすすめよう。
学習活動：テーマを持つ学習、計画を持つ学習を展開しよう。
文化伝承活動：地域文化を「伝える・創る・保存する」活動に取り組もう。
作業・生産・リサイクル活動：「働く・作る・再生（リサイクル）」する活動に取り組もう。
交流活動：「老・壮・青・少・幼」の各世代が連携協力する活動を心がけよう。
提言・提案活動：暮らしの課題を調査・点検（モニター）しよう。
安全活動：「高齢者事故ゼロ」にチャレンジしよう。
- ⑤ はつらつとしたクラブづくりをすすめる。
役員構成：高年、若手、女性のバランスの取れた役員構成にしよう。
若手育成：研修プログラムを体系化して後継リーダーを育成しよう。
広報・情報の収集と発信：身近な情報を集め、組織内外へ広報（PR）しよう。
他団体・組織との連携協力：地域の諸団体との連携をすすめよう。
- ⑥ クラブ発展の基礎強化をすすめる。（以下組織内部的なことなので略）

(2) 老人クラブの具体的活動内容

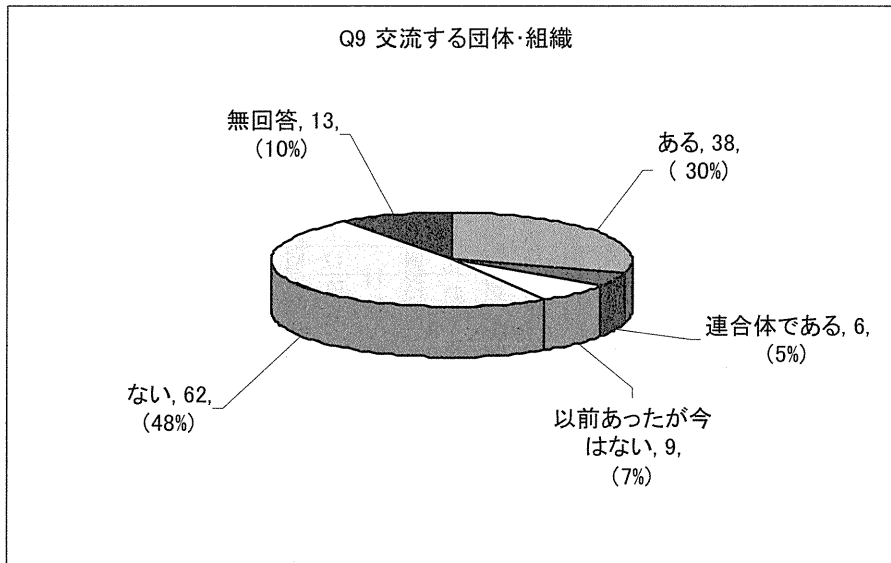


具体的に宮崎市の老人クラブの活動で、一番多い活動は「旅行」で88クラブ、69%が取り組んでいる。次に「独居老人の訪問など」が83クラブ、65%で取り組まれている。さらに、「グランドゴルフ」81クラブ、63%、「慶弔」77クラブ、60%、「環境整備・美化活動」70クラブ、55%と続いており、以上5つが過半数のクラブで取り組まれている活動である。

続いて「小中学生との交流」が62クラブ、48%、「健康学習」と「町の美化・景観保全」が59クラブ、46%、の3つが4割台である。「会報の作成・配布」が44クラブ、34%、「ゲートボール」39クラブ、30%、2つが3割台であり、後は2割台かそれ以下になるが「幼児との交流」32クラブ、25%、「カラオケ」31クラブ、24%、「ウォーキング」24クラブ、19%、「地域文化・伝統芸能の継承」17クラブ、13%、「健康体操」「園芸・ガーデニング」「リサイクル活動」が16クラブ、13%、「ボランティア活動」13クラブ、10%、「調査・点検活動」8クラブ、6%、という状況である。「高校生などとの交流」「子育て支援活動」「政策提言」は皆無ではなかったが、まだ活動の弱い分野である。このように、老人クラブの実際の活動も極めて多様になってきており、かつての老人クラブ＝ゲートボールというイメージは、現在ではもう当てはまらないことになる。

しかし、各単位組織で多くにことをやるのは難しい。全体でやる活動と、グループでやる活動を分けたりして、クラブの特徴を生かした活動が必要になる。連合会レベルでの活動の調整を行う必要もあろう。

(3) 老人クラブとの子ども等交流



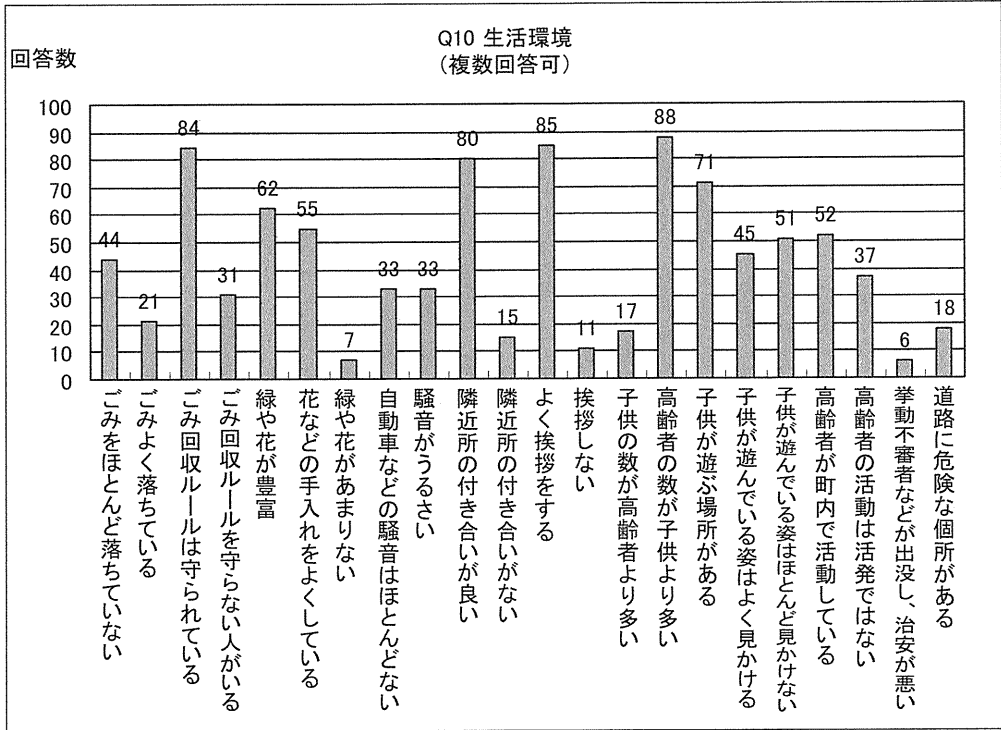
注：「ある」の回答例：幼稚園、保育園などで餅作り、交流会など

前の質問と関連するが、核家族化の進展の中で、3世代家族が減少し、祖父母と孫の世代の交流機会が減少しているの、異世代間が接触する機会を作ることは大変重要な課題になっている。それは高齢者にとっても、子ども達にとっても重要なことである。先の質問には「小中学生との交流は」62クラブ、「幼児との交流」32クラブで回答を得たが、ここで保育園、幼稚園、子どもクラブとの恒常的交流という形で質問したところ「ある」と回答したクラブは、連合体レベルでの交流を含めて44クラブ、34%に留まった。「以前はあったが今はない」というものも少なからず存在し、むしろ後退現象が起きているのではと思われる。

高齢社会に突入した現在、異年齢間の交流を深め、地域コミュニティの絆を強固にしていくことが急務となってきている。少子化の流れを止めるには、地域で子育てを出来るシステムを再構築していく必要がある。子どもを母親1人が育てる、あるいは核家族の中で育てるのは難しいからである。子どもは地域の宝であり、未来の地域の担い手である。しかし、実際には子どもと高齢者の交流機会は減少している。昔の子どもは子ども達だけで活動することができた。子どもクラブは子ども達が自主的に運営していた。今の子どもたちは、社会的な事情の変化(危険が増えた)もあり自主的活動が困難である。子ども達と接触することは、高齢者にとっても楽しみであり、喜び、生きがいになるはずである。異世代交流は、今後もっと取り組みを強化すべき重要な課題であると思われる。

6 老人クラブと地域

老人クラブの活動を考えるとき、地域の環境が考慮されなければならない。そこで、生活環境について質問してみた。最も多いのは「高齢者の数が子どもより多い」で88クラブ、69%である。逆に「子どもの数が高齢者より多い」のは17クラブ、13%に過ぎない。都市地



域でも子どもより高齢者が多い社会になっていることを表している。「よく挨拶をする」85クラブ、66%、「ゴミ回収ルールは守られている」84クラブ、66%、「隣近所の付き合いはよい」80クラブ、63%が続く。これらは判断が難しい。都市化の進んだ宮崎市としてはそれほど悪くないと判断するか、かなり悪くなっていると判断するか。「ゴミ回収のルールを守らない人がいる」が31クラブ、24%あるということがむしろ問題かもしれない。

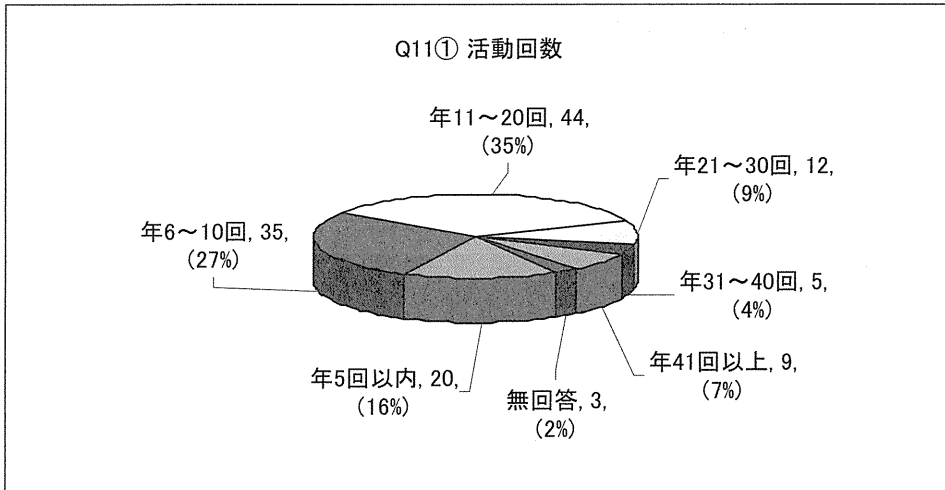
宮崎市は観光都市が売りのものであり、きれいなまちづくりに力を入れている。「緑や花が豊富」62クラブ、48%、「花などの手入れをよくしている」55クラブ、43%であり、メインストリートだけでなく、地域レベルでも生活環境美化に努力していると判断できる。だが一方で、「ゴミがよく落ちている」が21クラブ、16%で指摘されているし、「騒音がうるさい」も33クラブ、26%ある。「道路に危険な箇所がある」18クラブ、14%なども合わせると、まちづくりの課題もけっこう多いようである。

「高齢者が町内で活動している」と評価するのは52クラブ、41%、に対し「高齢者の活動は活発ではない」は37クラブ、29%である。「子どもが遊ぶ場所がある」71クラブ、55%あるにもかかわらず、「子どもが遊んでいる姿をほとんど見かけない」51クラブが、「子どもが遊んでいる姿をよくみかける」45クラブより多い。宮崎市を暮らしやすいまちにするためには、子どもたちが安心して遊べ、高齢者との交流も活発な地域コミュニティの形成が必要であると考えられる。

7 行事の回数と参加状況

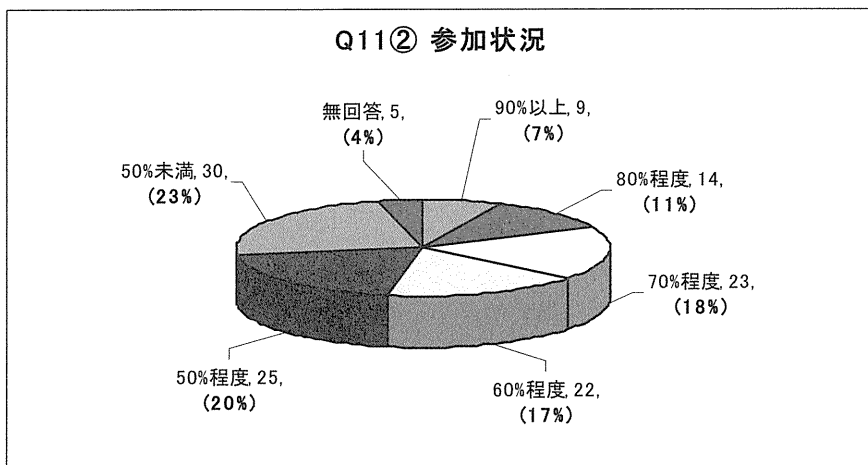
(1) 老人クラブの行事の回数と参加状況

① 老人クラブ(単位レベルでの)活動回数



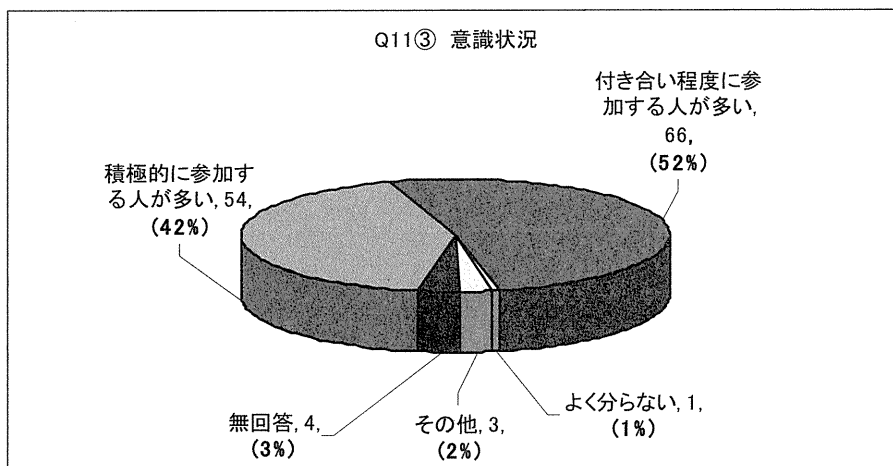
老人クラブの活動回数としては、年11～20回が最も多く、44クラブで35%である。月に2回弱ということになる。続いて年6～10回が35クラブ、27%、年5回以内が20クラブ16%の順になり、20回以内が77%を占める。活動の活発なクラブだと考えられる活動回数の多いクラブは、年に21～30回は12クラブ、9%、31～40回が5クラブ4%、年41回以上が、9クラブ、7%になる。これら活発な活動を展開している組織は、全体の20%を占めている。

② 活動へ参加状況



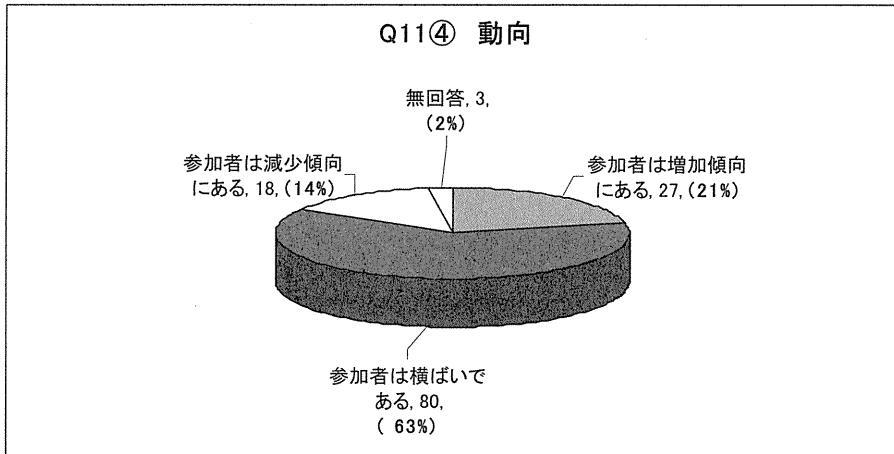
活動への参加状況を見ると、最も多いのが残念ながら「50%未満」のクラブで30クラブ、23%存在する。次に「50%程度」25クラブ、20%、「70%程度」23クラブ、18%、「60%程度」22クラブ、17%と続く。過半数のクラブ員が参加しているのは73%になる。また70%以上の参加率のクラブは36%である。参加率は活動の内容にも因るであろう。全員参加型の活動もあれば、一部の関心のある人たちが参加する任意参加型の活動もある。したがってこの質問の聞き方に問題があったかも知れないが、全体的には参加率のよい組織、まあまあの組織、あまり高くない組織に分かれるようである。老人クラブの活動を見る上では組織の人数と共に、その結束力も重要な要素であることになる。

(2) 活動に対する会員の意識状況



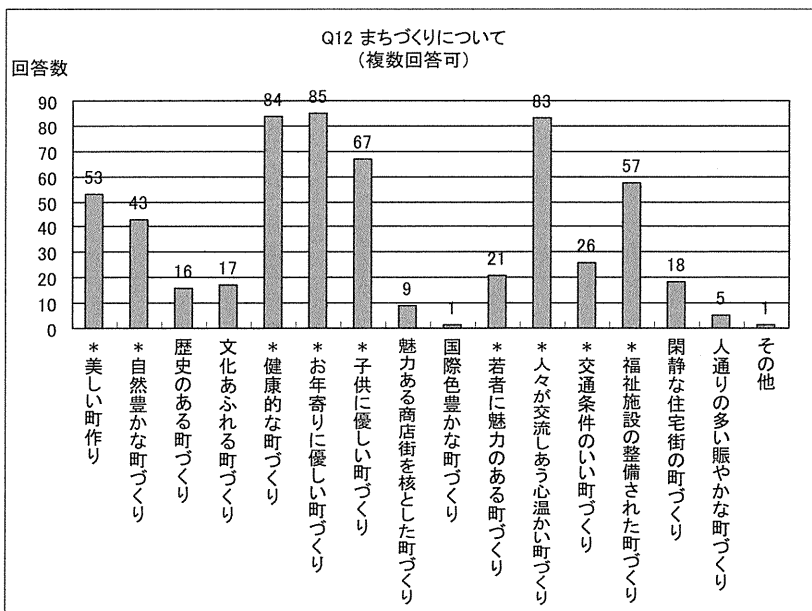
次に参加者の意識状況を聞いてみた。これも残念ながら「付き合い程度に参加する人が多い」が66クラブ、52%で、「積極的に参加する人が多い」54クラブ、42%を上回っている。「付き合い程度に参加する人が多い」というのは、やりたいことと実際やることの間になんらかのずれがあることによるものと考えられる。自ら自発的にやれるような積極性を引き出すような活動を展開していく必要がある。

(3) 活動の参加者の動向



老人クラブの活動への参加者の動向は、横ばいであると回答したクラブが80クラブ、63%と最も多く、同じ参加者が継続的に活動を支えていることが伺える。また「参加者は増加傾向にある」が27クラブ、21%で、「参加者は減少傾向にある」18クラブ、14%を上回る。老人クラブの組織率や会員数は減少傾向にある中で、参加者数については比較的健闘していると考えられる。しかし、活動を広げていく必要があるので横ばいで満足している訳にはいかない。

8 老人クラブとまちづくり



今後の地域社会を考えると、日常地域の中で最も長い時間を過ごすのは高齢者達である。したがって高齢者は地域をどのようなまちにしていくなか強い関心を持っていると考えてよい。まちづくりの方向として最も多いのがやはり「お年寄りに優しいまちづくり」で85クラブ、66%である。それとほぼ同レベルで、「健康的なまちづくり」が84クラブで66%、「人々が交流しあう心温かいまちづくり」が83クラブで65%である。この3つが高齢者達に共通した目指すまちづくりの方向性ということになる。これに続くのが「子どもに優しいまちづくり」67クラブ、52%で、高齢者と同様に、地域で生活する時間の多い子どもたちにも目が向けられている。

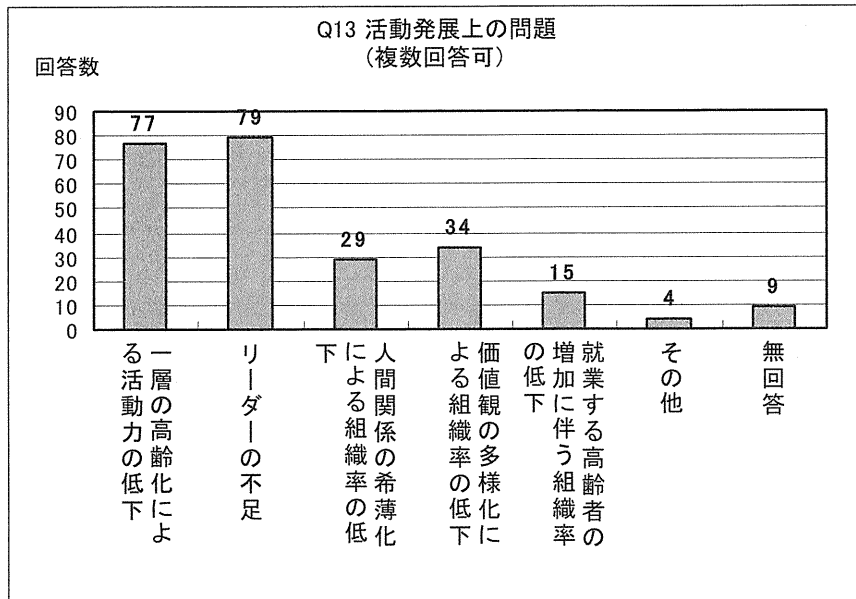
以上の4つに及ばないが、「福祉施設の整備されたまちづくり」57クラブ、45%、「美しいまちづくり」53クラブ、41%、「自然豊かなまちづくり」43クラブ、34%となりこのあたりが支持率が高い。

「交通条件のいいまちづくり」26クラブ、20%、「若者に魅力のあるまちづくり」21クラブ、16%などは、若い層には支持されるのであろうが、高齢者の中では割に低い。さらに「魅力ある商店街を核としたまちづくり」「人通りの多い賑やかなまちづくり」にはほとんど支持は得られていない。これはクラブの立地場所が影響していると考えられる。

また、宮崎市が戦後新しく発展してきた都市のためであろうか「文化あふれるまちづくり」は17クラブ、13%、「歴史のあるまちづくり」は16クラブ、13%と意外に少ない。

ともかく、まちづくりの方向性について、少子高齢社会が意識され、かなり共通した認識が形成されていると考えてよい。

9 老人クラブの活動上の問題点

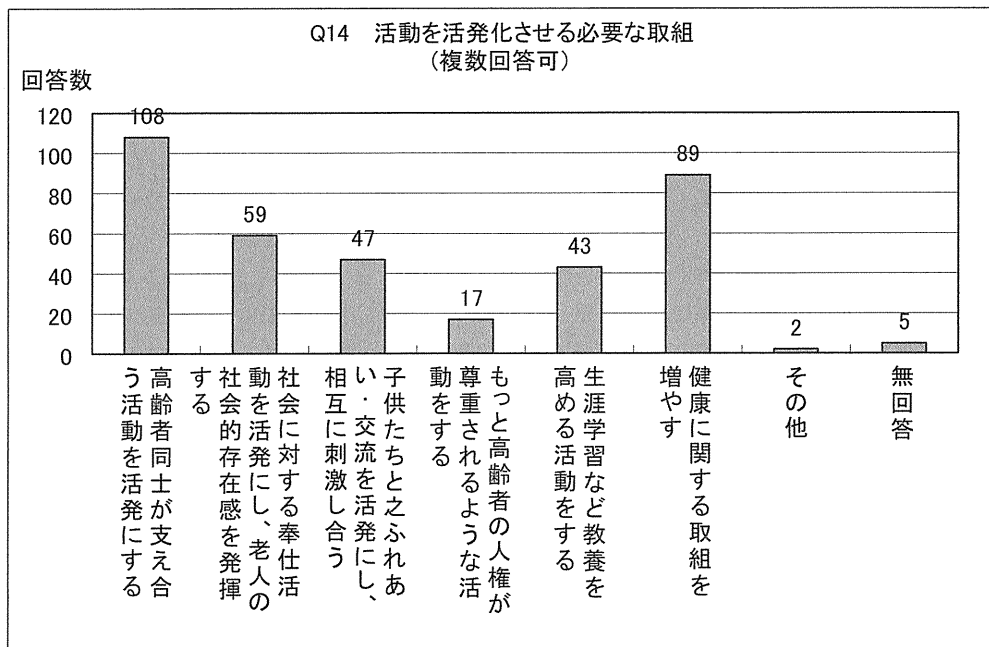


老人クラブの今後の活動にとって、何が問題となるか尋ねてみた。最も多いのは「リーダーの不足」で79クラブ、62%にのぼった。これとほぼ同レベルで「一層の高齢化による活動力の低下」で77クラブ、60%である。共に6割を超えるクラブが、このことを危惧していることになる。高齢社会とは長寿社会であり、社会経験と知識の豊かな高齢者が多く存在する社会である。したがってリーダー候補もたくさんいるはずである。また長寿社会で高齢者の数もどんどん増えるはずである。このような心配があることは、活動のあり方について検討する必要があることを示していると考えられる。リーダー養成には特段の対策が必要のようである。

この2つに続くのは「価値観の多様化による組織率の低下」34クラブ、27%、「人間関係の希薄化による組織率の低下」29クラブ、23%、「就業する高齢者の増加による組織率の低下」15クラブ、12%である。老人クラブの活動内容を魅力ある多様なものに変えていく必要がある。

10 老人クラブ活発化への取り組み

それでは老人クラブの活動を活発化させるにはどうすればいいか尋ねてみた。「高齢者同士が支え合う活動を活発にする」が108クラブ、84%と圧倒的な支持を得た。高齢社会の急速な進展の中で、地域の中で孤立し、十分目の行き届かない高齢者も存在している。そこで、このような自分たちで支え合うという発想が強くなっているのであろう。高齢者が将来に不安を持つという状況は、嘆かわしいことであるが、自分たちのことはできるだけ自分たちの間で解決したいという思いの表れであると考えられる。



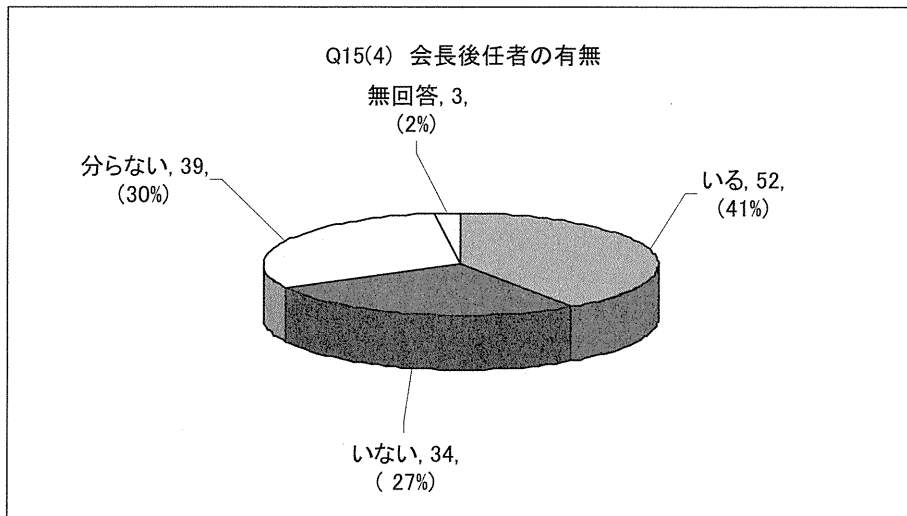
次に挙げられたのが「健康も関する取り組みを増やす」で89クラブ、70%である。高齢者の皆さんが元気で長生きしたいと望んでいることを表している。これもどちらかといえば、自分たちのことはまず自分たちで責任を持つという思考である。これに次いで「社会に対する奉仕活動を活発にし、老人の社会的存在感を発揮する」が59クラブ、46%と「子ども達とのふれあい、交流を活発にし、相互に刺激しあう」47クラブ37%が出されている。この2つは地域貢献活動とでもいえるもので、社会活動である。また「生涯学習など教養を高める活動をする」は43クラブ34%であり、高齢者も自己研鑽・人間発達を志向している。「もっと高齢者の人権が尊重されるような活動をする」は17クラブ13%と少ないが、大切な活動であろう。

以上のように老人クラブの活動活性化の方向性は、会員自身や会員相互の問題を重視する志向が強く、社会活動的側面はその次に位置する。急速な高齢化社会の進展で、高齢者が安心して老後を暮らすというより、強い不安を抱いていることの証であろう。

11 老人クラブ会長の人間像

最後に老人クラブの活動を精力的に担っている会長さん自身の人間像を明らかにするために聞いてみた。まず会長さんの平均年齢は76.5歳である。最も若い会長さんは65歳で、60歳代の会長さんは12名で、10%である。70歳代前半の会長さんは29名で、23%である。そして70歳代後半の会長さんが最も多く52名で、41%を占める。さらに80歳代前半は25名で、20%、80歳代後半は7名で6%、なんと最も高齢の会長さんは90歳である。老人クラブの会長さんの中にも「若手」層、「中年」層、「高齢」層がいることになる。60歳代の会長さんがいて多少安心したが、行動力を考えるならもう少し平均年齢が若くなった方がいいだろう。また平均会長在任暦は4.8年である。会長暦の分布をみると、1年未満が4名、1年が最も多く28名、2年が20名、3年が14名、4年が13名というふうになり、4年以下が、79名67%を占めていることになり、比較的順調に世代交代がなされていることを表わしている。ところが、5~9年が21名、10年が10名、11~14年が7名、15年2名、16年2名、最も長い人は20年である。10年以上合わせると22名、19%である。会長暦で分けると、「新人」(2年以下、44%)、「中堅」(3~4年、23%)、「ベテラン」(5~10年、26%)、「大ベテラン」(11年以上、10%)というふうになる。いくら有能な会長さんでも長期に会長を担うことはいかかなものか。出来るだけ短い期間で交替し、多くの人が会長を経験するほうが望ましいであろう。一度やめても元気であれば、次の機会にやればいい。

老人クラブの規約に会長の任期が何年と規定してあるのか、調べないとわからないが、普通1年で更新するのが常識であろう。再任を妨げないという規定があったとしても、3回がいいところではなかろうか。指導者の若返りが追及されるべきであろう。そこで、後継者の有無について聞いてみた。



会長後継者の有無については、「いる」が52クラブで41%、「いない」が34クラブ27%、わからないが39クラブ30%である。「いる」が「いない」を上回っているが、「わからない」という回答はほぼ「いない」に近いと判断される。「いる」という確信が持てていないからである。先の会長暦からして、次の会長に積極的になるという人が少ないことが会長暦を長くしており、将来に不安のある組織が少なくないというふうに判断される。次期リーダー層の育成を積極的に行い、また指導部の複数制によって活動の持続性を確保することが必要であろう。1人の有能なリーダーに頼り過ぎ、会長を長期間続けると、もしもの時に組織の運営が危機に陥る危険性があるからである。ともかく、老人クラブにおける会長問題はなかなか難しい問題である。

12 自由記述

自由記述欄に寄せられた意見を、整理して掲載する。老人クラブの活動に関する率直な意見が寄せられており、今後の参考になろう。(意味が通るように一部文章を修正した。また数多くの意見が寄せられたがすべては掲載できなかった。プライバシー保護の立場から具体的地名は外した。)

*リーダー不足問題

- ・後任探しに苦労しているのを一般的に聞いている。当会も同様です。会員増加はなかなか難しいです。
- ・会長後任者について、皆消極的で自発的な就任者はいません。
- ・リーダー養成が急務です。布教宣伝を目的とする人たちがリーダーとなりたがることに要注意。
- ・地区に3クラブあったが、会長後任者がなくて2クラブ解散しました。集落の遠いことや交通が不便のため、会員増加は考えられない。

- ・人集めに苦勞しているし、リーダーシップは経験不足です。
- ・会長職は押し付けられたのが実情です。老人クラブの活動は、まずリーダーをする元気な人が引っ張っていくようにしなければ駄目なようです。
- ・役員になる人がなかなかいない。特に有識者が加入を遠慮する。これは役員にさせられるからということが考えられる。

*加入者の減少問題

- ・規約または会則などがわずらわしいみたいで、束縛されない自由で、数人程度で趣味など同じ人たちでやっていたりする。
- ・地域にもよるが高等教育を受けた方々などが老人クラブに参加しようとしないう傾向がある。
- ・会員の増加は非常に困難である。特に、社会的に高く評価される人が老人クラブに入会してくれない。
- ・当地域では独居老人や、夫妻ともに高齢者の家庭への対応が重要な問題となってきた。会員の新規加入は困難である。
- ・会員になられる方が少なくなりつつある。若い人たちの協力も必要と思っている。加入者の減少とリーダーがいなくなることによる老人クラブの解散問題が危惧される。
- ・農家の仕事は今70-80歳でもトラクターに乗っており、老人クラブに加入する人がいない。
- ・私たちのクラブは、男子13名、女子29名で活動していますが、平均年齢男子81歳、女子80歳となっています。新規加入者がなく、老いて他界されて少しずつ減少しつつある現状です。
- ・近年地区公民館等の活発なサークル活動や趣味のグループ等があって老人クラブの存在感が希薄となり、住宅団地では地域の連帯感も低いので会員の新規加入を図ることは困難である。地区では農業者が多数なので定年がなく、会則では65歳以上となっていますが、70位より入会されています。

*活動資金問題

- ・活動助成金を増額して欲しいです。
- ・運営資金の確保が困難である。
- ・老人クラブ活動の場の整備が遅れている。単一の老人クラブが自主的に活動するというより、補助金に頼る市行政の下請機関になりやすい、ピラミッド型の組織が強調されている。

*活動場所がない

- ・自らの活動場所がほしい
- ・公民館などがなかったので活動場所がほしい。クラブの活動拠点は屋外の児童公園で、天候に左右され、飲食・会食によるコミュニケーションも取れない。

*その他

- ・活動を指導してほしい、高齢者が理解しやすい情報の提供がほしい。
- ・老人はもっと威厳を持つべきで、ゲートボールなどをして遊ぶべきではない。老人はもっと

- 政治に関心を持つべきで、先が短いだから、何事にも恐れず子孫のために発言、行動すべきです。そうすれば老人は尊敬されるようになり、社会の荷物とはみなされたいと思います。
- ・老人組織への理解、各種料金などの割引などがほしい。
 - ・自分だけ、自分の家庭だけという考え方が強く、全体についてどう向上させていくかという考え方が足りない。ボランティアの理解を誤った方向で理解している。活動するとすぐお金の結びつけ、奉仕の活動に結びつかない。
 - ・会則とか責任者とかが感じがらめにするのではなく、明るく、誰でも入れるような自由なクラブの囲いは作れないものだろうか。明るく皆々が誰でも付き合えるような、花の泉にして何時までも助け合って行ける様な、護り合えるような気持ち良い本当の極楽の長生きの園作ってみたいものです。
 - ・一人暮らしの人に重点を置いた活動を目指しておりますが、なかなか思い通りになりません。90歳以上の方には、周囲にしっかりした介護者がおられるため、老人クラブが立ち入る場がない。大規模災害の防止のため、自治会と共同して訓練を必要です。
 - ・「高齢者クラブ活動の手引き」がほしい。
 - ・老人クラブという呼び名を皆さんで考えてほしいもう少し明るい呼び名を全国で通じるものにしてほしい。
 - ・お年寄り頑固なところもあるが、それ以上に知恵を持っています。その知恵を生かす工夫をして行きたい。
 - ・私の代になってから、公民館の花植え、夏期の水やり、草刈などに2～3の会員と一緒にそれとなく実施しております。「もうこの年になって、アクセクセンで、今まで面白おかしく生きてきたんだから、少しばかり余力があれば社会に貢献（恩返し）しよう」と誘っています。
 - ・県老連、市老連は懸命に指導して下さいますが、縦割りでなく、横割りの活動を指導して欲しい。単老同士が協力し合えるような体制作り。
 - ・私、女性上位待望論者です。政財界は男悪者ばかり、アテネオリンピックの女性強しなど思い合わせますと我らの役員も他に先んじて、女性に変えてはいかがでしょうか。老人クラブは自治会や公民館とは別個の独立団体であると考えべき。
 - ・本会はグランドゴルフ部会をもっているのですが、グランドゴルフをやるために入会する人がいるため会員総数の減少はあまりないが、その人たちは他の本会の行事にあまり参加しないのが難点である。
 - ・私のところでは、健康な60～70歳代と、80歳以上の高齢者チームと2つに分かれて活動している。

1.3 総括と課題

本稿は、宮崎大学地域貢献特別支援事業の一環として取り組んだ調査をまとめたものである。この「老人クラブ活動調査」は地域コミュニティ論という視点と、高齢社会問題という2つの視点からの分析を試みている。老人差別を克服し、高齢者の人権を護り、お年寄りが暮らしやすい、エイジフリー社会を目指す人々の立場に立って調査し、分析したつもりである。1994年頃から男女共同参画社会という言葉が、わが国の行政用語として使われるようになったが、私はその延長上に老若男女共同参画社会を志向している。

日本は今、世界史に類例を見ない急速な少子高齢社会、人口減少社会に突入しつつある。

2003年の合計特殊出生率が1.29という状況（2004年も下げ止まらず）になり、1990年の1.57ショックを基点に着手された少子化対策、子育て支援政策は未だその実効をみないのである。政府の大誤算であり、政策の失敗である。俄に、少子高齢社会が注目を浴び、マスコミでも特集が相次ぐ。冒頭でも述べているが、高齢者問題は福祉・年金問題という側面から議論される場合が多いが、それは高齢者の人たちにとっては甚だ失礼なことである。長寿化の側面からもっとポジティブな議論をしたほうがいい。長寿社会は、職業生活や結婚・子育てといった忙しい第一の人生を一応終わり、人生の再出発として余裕とゆとりを持ち、自らの経験を社会へ還元する第二の人生、あるいはそれをも超越した第三の人生を生きることができるといえる社会ということである。成熟した地域社会の重要な一翼として、高齢者の存在感が増す社会である。

分析してきたように、現在の老人クラブの活動は活発で多様な活動を展開し社会的に重要な役割を果たしている。これらのボランティア活動は今まであまり社会的な評価がなされてこなかった。しかし、今後高齢社会の一層の進行の中で益々重要な役割を果たすことは間違いない。市場経済万能主義、競争と効率性が求められ、金儲け本意の世界とは別の世界である。しかし、みてきたように、彼らの活動は社会を支える活動の不可欠の部分であることを評価すべきである。一方で組織率の低下等、欲求や関心、生き方の多様化の中で、組織化が難しくなっているという問題点も抱えている。もっと自由に伸び伸びとした活動を行って欲しいのであるが、残念ながら将来に対する不安が払拭できず、ボランティア活動どころではないという状況がある。高齢者に余計な心配をさせずに、活動してもらえ環境を整えて行かねばならない。そのことが成熟社会としての社会の進歩をもたらすのである。予想によれば、我が国人口のピークは2006年ということであったが、既に2004年は男子の人口が減少し、2005年上半期には人口減少を示した。人口減少社会下の社会を構想するに当たって、将来を悲観的・否定的にのみ考えるのではなく、長寿社会・成熟社会という観点からの発想が必要になってきている。基本的にはそこにしか「希望」の社会は描けないだろう。

参考文献

小川全夫『地域の高齢化と福祉—高齢者のコミュニティ状況—』恒星社厚生閣、1996年

辻正二『高齢者ラベリングの社会学—老人差別の調査研究』恒星社厚生閣、2000年

遠藤薫、山本和高編著『進化する老い、進化する社会』アグネ承風社、2000年

一番ヶ瀬康子、河島修『高齢者と福祉文化』明石書店、2001年

天田城介『<老い衰えゆくこと>の社会学』多賀出版、2003年

全国老人クラブ連合会ホームページ

全国老人クラブ連合会：『老人クラブ実践シリーズ』

「健康活動事例集：健康づくり」平成14年

「世代交流活動事例集：ふれあい」平成13年

「創作活動事例集：演じる」平成12年

「リサイクル活動事例集」平成9年

宮崎市介護長寿課 「高齢者の生きがいと健康づくり推進事業 高齢者アンケート調査報告書」平成14年2月